

診療所での管理栄養士の有意性を さまざまな角度から検証



「管理栄養士と開業医が
コラボする会」
ホームページ

8月3日、「第5回管理栄養士と開業医がコラボする会」が会場（大阪樟蔭女子大学）& オンラインのハイブリッドで開催され、約100人が参加。会場には約60人が足を運び、活発な意見交換が行われた。



会場には多くの多職種が参加

診療所の経営の安定化と 治療効果の向上に期待

近年、地域の在宅患者の栄養管理や生活習慣病患者の栄養食事指導に対するニーズが高まってきている。こうした状況に鑑み、大阪樟蔭女子大学健康栄養学部教授の井尻吉信氏、医療法人松若医院院長の松若良介氏が発起人となって、2019年に「管理栄養士と開業医がコラボする会」が発足した。さまざまな活動を通じて、管理栄養士と開業医が協働することの有意性を発信し続けている。



司会進行を務めた発起人の井尻吉信氏

同会が発足した翌年の20年度診療報酬改定では「外来栄養食事指導料1」「同2」が新設され、オンラインなどの情報通信機器等を用いた栄養食事指導でも診療報酬が算定できるようになった。さらに「同2」は、他の医療機関および栄養ケア・ステーションの管理栄養士による指導でも算定が可能であることから、「同1」「同2」を算定する診療所は増加傾向にある。診療所に管理栄養士を配置することで、糖尿病や高血圧症といった生活習慣病を抱える患者の生活の改善や診療報酬算定にともなう経営の安定化などが期待できるようになったため、同会の活動も年々活発化している。



会場とオンラインのハイブリッドで情報を発信

同会では、診療所が管理栄養士を雇用する「3つのメリット」を次のように整理し、周知を図っている。

- ①生活習慣病やフレイルなどの進行抑制と治療効果の向上が期待できる
- ②診療時間だけではわからない患者の本音や悩み、治療につながるヒントを見つけられる
- ③対面だけでなく、オンライン栄養食事指導でも診療報酬が算定できる

同会では、地域の患者に寄り添

Event Report

●第5回管理栄養士と開業医がコラボする会



会場参加者からも活発な意見が寄せられた

うがかりつけ管理栄養士”の存在意義の啓発に尽力している。各種情報発信やイベント開催などの地道な活動が奏功して、同じベクトルを持つ仲間たちは次第に増えつつあるという。

管理栄養士の存在意義を事例を交えながら紹介

同会はこのたび、情報発信・交換を目的とした「第5回管理栄養士と開業医がコラボする会」を8月3日に会場とオンラインのハイブリッドで開催した。当日は約80

人の医療従事者が参加。会場の大阪樟蔭女子大学には管理栄養士、医師、歯科医師、薬剤師ら約60人が集結した。

開会にあたり、発起人で代表世話人の松若氏がビデオメッセージで「当会の活動を通じて、診療所に管理栄養士の活躍の場を広げていきたい」と呼びかけた。

特別講演では、医療法人葛西医院院長の小林正宜氏が登壇。「外来から在宅緩和ケアまで管理栄養士が活躍する未来への提案『KISSA2隊活動を通して感じた地域医療のNEXTチャレンジ』」というテーマで講演を行った。

コロナ禍の20年、地域社会の医療課題の解決を目的に京都で発足して以来、全国に広がりつつある医療・介護チーム「KISSA2隊」



特別講演の講師、小林正宜氏



一般講演の講師、根来光哉氏

の大阪隊長を務める立場から、地域活動を通じて見えてきたプライマリケアのあり方について考察。さらに、在宅医療における課題である「多職種連携による『食』へのアプローチ」についても触れ、「当院でも管理栄養士を雇用し、ポテンシャルを確認したい」と述べた。続いて一般講演では、くれよん薬局管理栄養士の根来光哉氏が「かかりつけ管理栄養士が繋ぐ、診療連携」薬局管理栄養士の可能性」について講演した。

従来の診療連携は、医療機関からの情報が薬局にとどまる「一方通行」だったが、薬局から医療機関へ栄養食事指導の内容などをフィードバックする体制を整えたことで指導件数が増え、ニーズの拡大につながったことを報告。「かかり

つけ管理栄養士の実現や、薬局の付加価値につながる事が期待できる」と述べた。

情報提供では、同大学「井尻ゼミ」の学生たちが地域の高齢者のフレイル予防を目的に制作した「80GO（ハチマルゴ）」かるたを紹介。さらに、井尻氏と医療法人蒼泉会上仁上田クリニック理事長の上田量也氏が座長を務めたフリーディスカッションでは、診療所における管理栄養士の雇用形態や業務内容など、さまざまな質問や意見が交わされた。



フリーディスカッションでは、井尻氏、上田氏（左から2人目）が座長を務めた